

<エッセイ>私と日中比較文学の縁

| | |
|-----|---|
| 著者 | 周 関 |
| 雑誌名 | 日文研 |
| 巻 | 57 |
| ページ | 9-14 |
| 発行年 | 2016-09-30 |
| URL | http://doi.org/10.15055/00006492 |

<エッセイ>私と日中比較文学の縁

| | |
|-----|---|
| 著者 | 周 関 |
| 雑誌名 | 日文研 |
| 巻 | 57 |
| ページ | 9-14 |
| 発行年 | 2016-09-30 |
| URL | http://doi.org/10.15055/00006492 |

私と日中比較文学の縁

周 閑

平成二八年一月三〇日の夕方、薄闇の中で日文研ハウスに着きました。一四年ぶりに日本に来ました！ しかも、古都の京都です！ それに、研究の天国と言われる日文研です！ 夢を叶える興奮、北京ではまだ見られなかった緑、そしてどこから漂ってきた臘梅の香が心細さと淋しさを和らげてくれました。

大学卒業までは、日本と全く関係のない人生でした。日本文学を勉強するのも、自らの選択ではなかったのです。

大学卒業の年、あの六月の「事件」の影響で運動の中心だった北京大学の卒業生は大学院入学試験を受ける資格を取り消されました。でもその後、先生方の斡旋で、中国文学部は三名の学生を大学院に推薦できるようになりました。幸い、私はその中の一人でした。その時の北京大学「比較文学研究所」の所長、葉黛雲先生に「比較文学を専攻したいなら、日中比較文学を勉強してください」と言われました。嚴紹盪先生は研究所のお招きに応じて中国文学部の「古典文献」から「比較文学」に転動したばかり、日中比較文学専攻の院生がまだいないからです。しかし、当時の私は日本についての知識はゼロと言え、日本語は五十音図さえも知らない、日本文学と日本の歴史などについてもほぼ白紙でした。どうしたらいい、と三日間も悩んでいました。三日目の日に、葉黛雲先生のお宅を訪れ、「どうしても比較文学を勉強したいの

で、日本語と日本文学を頑張って補習していきます」と言いました。それで、嚴紹鏗先生の日中比較文学専門方向の初めての、中国国内でも最初の日中比較文学修士学生になりました。それが始点となって今日まで歩んできました。

大学院に入って直ちに、その辛さが骨まで沁み入りました。初めて大学院の第一外国語としての日本語共通科目コースに行った日の様子が今もありありと目に浮かびます。早々に教室に行って、はっきり聞こえるように一番前に座りました。ベルが鳴るとほぼ同時に、髪の毛がごま塩の清楚な女性の先生が入ってきました。いきなり日本語で話し始め、挨拶か授業の説明かそれとも講義の内容か、さっぱり分かりませんでした。茫然とした顔に気づいたのか、突然私の前に来て○・五メートルの距離で訳の分からない質問を立て続けに投げてきました。勿論一つも答えられませんでした。そして、「日本語習ったことありますか？」と中国語で聞き直してくれました。「ないです。」「ならここに来て何をするつもり？ 帰っていいよ。」聞き取れないに決まっていると覚悟していましたが、やっぱり地面に穴があれば入り込みたいほど恥をかきました。やっと授業が終わるまで堪えて、急いで宿舎へ帰り、タオルとボディソープなどを取って公衆浴室に行きました。（中国の大学生と院生は全員キャンパスの中の寮に住んで、一九八〇年代から九〇年代、お手洗いは棟内の公衆トイレ、シャワーは校内または校外の公衆浴室に行くしかなく、真冬に女子学生は宿舎に戻った時、髪の毛がもう固く凍ってしまいました。）私の顔の涙をシャワーのお湯と一緒に洗い流したのです。

日本語をゼロから独学するほかはありません。当時の北京大学ではまだ日本語学部が設立されてなくて、「東語学部」に日本語専攻があるだけ、一クラスにたった十数人くらいでした。入門のクラスに聴講に行きましたが、最初は、四年も年下の学生たちから、変わったお猿さん

を見るかのような眼差しを浴びるほどでした。でも、この招かれざる客の受講は一コマも欠けることはありませんでした。今振り返ってみるとき、その厳しい女性の先生にはとても感謝しています。その刺激がなければ、思い切り決心して懸命に頑張ることができなかったかもしれませぬ。

学問の道を志して歩き出した時から、人格も学識も素晴らしい先生方に出会ってばかりです。指導教官の嚴紹盪先生からも学問に励むことのありさまを見聞きして大きな影響を受けました。当時は大学の先生は皆、個人の研究室を持っていなかったため、よくお宅にお邪魔しました。初めて厳先生のお宅を訪れた時とても印象深かったです。部屋に入ると、玄関から本の山並みでした。その本の狭い隙間を通して先生の机の前に辿り着くと、目の前に机側の壁と反対側の壁の間に何本もの紐を張って、紐の上にメモカードがいっぱい掛けられていました。カードに小さい字がびっしり書かれているのを見て、本当に「知識の海」にいる感じがしました。パソコンのない時代に、厳先生のコツコツ積み重ねていく姿に頭が下がりました。

高校生と大学生時代に受けた教育に、日本文化についての内容がめったになかったせいか、大学院に入ってから日本についての興味はかえってますます濃厚になりました。ある先生に「反日派」と「親日派」のどちらになりたいか、と聞かれたとき、考える間もなく「親日派です！」と答えました。その先生は微笑んでゆったりと言いました。「僕だと『知日派』になりたいなあ」この一言にはっと気が付き、「本当の研究者になるためには客観的に物事の本質を分析しなければならない、私は日中比較文学領域の『知日派』になれるように頑張っていく」と、その時決心しました。

日中比較文学で私が一番集中しているテーマは川端康成文学研究です。これが私にとって偶

然とも言え、必然とも言えます。偶然というのは、大学生の時優秀レポートの賞品として『ノーベル文学賞受賞作家の創作談』という本を貰ったことが、当時日本に唯一のノーベル賞受賞作家の川端康成に目を注ぐきっかけとなりました。必然というのは、私は心の底から川端文学に惹かれているのです。その仄かな哀しき、その清らかな美しき、そのしんとした静かさ、その朦朧とした慕わしき、その払っても消えない淋しき……すべてが私を引き寄せています。「研究テーマを決めるといいうのは、妻を探すことに髣髴し、好きでなければ一緒に居られないからです」と、北京語言大学のイスラエル人の教え子がかつてこう言いました。まったくその通りです。川端文学の魅力に捉えられているので、私は何回読んでも飽きません。さらに、奥の深い川端文学は、年齢によって味わえる余韻と、心うたれる些細な場面などが違ってきます。ですから今迄出版した五冊の私の本のうち、三冊もが川端文学研究です。それに、研究すればするほど沢山の謎が見えてきて、知識の不足と勉強の足りなさが同時に感じられてきました。「知日派」になれるまでの道はまだ遠い、です。

ところが、その道で私の研究を進めるには一番の困難が研究資料の欠如です。中国の川端文学研究の始まりはかなり遅いと言えます。川端文学の翻訳と日本学界の研究成果の紹介及び中国自身の先行研究が少なかつたのですが、それに加えて、日本語の資料がもっと探しにくいのです。一方では、感受性に富んだ川端文学を研究するために、どうしても必要なのは日本の現地体験なのです。でも、中国文学出身の私は、本科から博士まで全部北京で、日本に留学した経験が全くありません。川端文学に描かれた志野茶碗や越後の雪国、伊豆の温泉、北山の杉などは、全部実感のない想像に止まっていました。

しかし幸運にも、とうとう二〇〇〇〜二〇〇二年、愛知大学に行く機会が訪れました。日本

文学の研修ではなく中国語を教えるためでしたが、私の人生で初めての日本文化と接触するチャンスでした。愛大の二年間に一か月で使える給料は九〇〇ドルしかなく、これを除いて残った四分の三あまりは中国国内の大学に上納する決まりでしたので、私は一生懸命節約してできる限り川端文学のゆかりの地を辿る旅に出ました。その中の一つは、『雪国』の舞台、新潟県越後湯沢の旅です。国境の長いトンネルを抜け、川端の足跡を追いながら主人公の島村の行った処を一々探し、そして『雪国』の執筆に使われた高半旅館に泊まりました。雪の季節ではありませんでしたが、晩秋の澄みきっている空の下、茜色に染まった山並みと、道端の斜陽に照らされてふわふわとした萱の穂を見て、小説中の「萱の穂が一面に咲き揃って、眩しい銀色に揺れていた」場面とその「秋空を飛んでいる透明な儚さ」を初めて肌を感じて受け止めました。

愛知大学を離れて一四年間、日本に来るチャンスに恵まれませんでしたが。この一四年間で、私の研究も川端文学から近代日本の中国学に広がってきています。そのきっかけは、一高時代の若い川端が今東光と一緒に東京帝国大学へ中国文学講座を傍聴に通っていたことです。その時講座を担当した先生は、近代中国学の先駆者と言える、二八歳で東京帝国大学中国文学科の助教授になった塩谷温です。その東大の塩谷温に加え、私が中国学の領域でさらに関心を深めている研究対象は、京大の狩野直喜と青木正児などの中国学者にも及んでいます。時間の移り変わりど研究の進みに従って、日本に行きたい、日本文化を肌で感じたい、研究資料を沢山読みたい、という憧れは日に日に強くなる一方でした。ようやく、今年「名物の底冷え」（川端康成の言）の中で「古都」の京都にある日文研に参りました。まるで夢のようで、その嬉しきは言葉になりません。

この原稿を書いている時は、ちょうど「一川煙樹 満城風絮 梅子黃時雨」の季節で、見渡す限り潤いある緑に包まれ、川端の「三方から古都を抱きつつむ山波が、古風な家並の上や道のゆくてに、京都へ着いたとたんに見えて、心はなごみ静まる」という一言を思い出しました。日文研には立派な図書館と森閑な自然があり、ここに来て五か月にもなっています。もう七か月後の帰国時には未練を残すに違いないという気持ちでいっぱいです。「一年って、あっという間で、どうしても足りない」と切に思っています。残りの七か月で、日本文化の優雅さと日中関係の緊密さを探求し心で感知して、「知日派」の目標に一步でも近づいていくように、充実した日々を過ごしたい。そして、再び次の夢の叶えられる日を待ち続けようと思っています。

二〇一六年六月二二日

日文研にて

(北京語言大学教授／国際日本文化研究センター外国人研究員)